◉―規格
16ミリ・カラー/35分
◉―価格
16ミリ/220,000円
VTR/50,000円
◉―対象
中学・高校・成人
◉―用途
美術・一般

光琳屋敷全景

◉―企画
エム・オー・エー美術・文化財団
(MOA美術館)
◉―製作
桜映画社
MOAプロダクション
◉―監修
元京都国立博物館館長
林屋辰三郎
東京大学工学部教授
稲垣栄三
建築家・東京大学講師
早川正夫

文部省特選　日本産業映画ビデオコンクール奨励賞

よみがえる光琳屋敷

映画『よみがえる光琳屋敷』を観て

美術評論家
山種美術館顧問　中村渓男

尾形光琳の晩年の住いが熱海MOA美術館の庭内に復元され、それによって制作されたこの映画は光琳芸術について説き、またその人となりや好みをカメラが克明にとらえ、わかり易くまとめている。

京都の街に栄えた元禄、正徳文化の本質や京の町衆生活の粋を結集したのが光琳であった。その代表作品を選び、それを中心にこの映画は展開させている。光琳芸術の特色である極めて美しい装飾性と大胆な表現法を忠実に伝え、見るものの心を楽しませると共にひきずり込ませることに成功している。

光琳以前に新風を興し、町衆文化に燈をともした先輩光悦、宗達の芸術をも紹介し、歴史的推移によっておこる変貌まで留意して比較対象を試みたことはまことに嬉しい。また光琳画が大きく見事に花開いた跡を辿った繊細さを高く認めたい。さらに絵画作品だけでなく、陶芸、漆芸、染織といった幅広い域にまで徹底的に臨んだことは光琳が万能の偉大な芸術家であることを物語ってくれた。

晩年の光琳には恵まれぬ現実があったにも拘わらず、表現された芸術には暗いかげすらない。優雅で華やかさを謳歌し、自身の芸術向上にのみ心血を注ぎ、「紅白梅図屏風」のような世界に冠たる立派な傑作を生むに至った。五九歳で生涯は終るが彼が果たした功績は燃えつきたのではなく、むしろ光琳屋敷復元によって永遠に輝き続けるであろうことをこの映画は教えてくれている。

紅白梅図屏風（MOA美術館蔵）

◉配給

青々庵と二階画室

◉——監修にあたって

東京大学工学部教授　**稲垣栄三**

こんど熱海のMOA美術館の庭に誕生した光琳屋敷は，尾形光琳が享保元年(1716)に亡くなるまでの数年間を過ごした京都のすまいの復元である。新町二条にあったこの屋敷には，光琳自身の工夫や好みが濃厚に現われていた。このことは，いま小西家文書として伝えられている史料のなかに，光琳自筆の平面図のほか，茶室の図や仕様書，見積書などが含まれていて，これらを通して伺うことができる。そしてまた，家屋に関するこのような史料が豊富に残っていたからこそ，今回のような復元が可能になったのであった。

建築家早川正夫氏による復元設計は，史料の語る内容に極めて忠実であって，その結果，画家光琳の建築に対する好み(美意識)を彷彿とさせるすまいが出現した。その敷地は間口7間半ほどで，京都の町家としては間口の広い方である。それを利用して主屋の南に露地をつくり，奥に3畳台目の茶室を設けたのだった。光琳がこの茶室をとくに入念に設計したらしいことは起し絵図からも見積書からも伺えるのである。

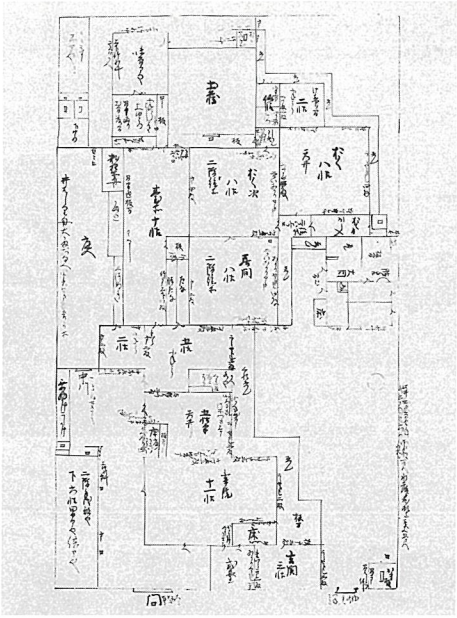
また主屋にも光琳好みの現われている所が随所にあって，玄関から縁伝いに奥に導かれる部屋の続き方，11畳の書院(客間)やその隣の5畳半茶室，梁を露出した2階の絵所など，いずれも，通常の京都の町家の作法にのっとりながら，意匠や材料の選択に工夫が凝らされていた。図面や書類としてのみ伝えられていた家屋が，こうしてまのあたりに見られるようになったことは，光琳の作品の発見にもつながることのように思える。

◉——あらすじ

江戸元禄期を代表する画家，尾形光琳。光琳と尾形家に関する史料は「小西家文書」として伝えられてきたがその中に晩年の住いと思われる光琳自筆の間取り絵図が残されていた。屋敷は建坪80坪(京間)余りの数寄屋造りの町屋で屋敷内には16畳の絵所—画室があった。光琳はここで代表作「紅白梅図屏風」を描いたであろう。

京都の富裕な呉服商に生れた光琳は，2代将軍の奥方やその娘東福門院御用の豪華な衣装を見慣れて育ち，また尾形家は光悦や宗達とも知遇があり，光琳の芸術活動に与えた影響は少なくない。

間取り絵図をもとに光琳屋敷の復元作業は始まった。復元に先立って時代考証や材料さがし等，正確な再現をめざしての試行錯誤が重ねられた。昭和60年12月，よみがえった光琳屋敷は光琳の好みがゆきわたり，私達はこの屋敷を通して，光琳の人と洗練された芸術と，そして近世市民の豊かな生活文化を偲ぶことができる。



光琳自筆の間取り絵図(文化庁蔵)

[尾形光琳　略年譜]

明暦3(1657)—⊙江戸大火(振袖火事)。
万治元(1658)—京都の呉服商「雁金屋」尾形宗謙の次男として生まれる。
寛文12(1672)—能の「装束付百二十番」を筆写。この頃父や兄と共に能の会で舞う。(15歳)
延宝6(1678)—東福門院没し，「雁金屋」これにより衰える。(21歳)
天和元(1681)—⊙綱吉，5代将軍となる。⊙西鶴「好色一代男」刊行。
貞享4(1687)—父宗謙没。(30歳)
元禄2(1689)—はじめて二条綱平邸に伺侯する。(32歳)(これ以後，綱平相手のお伽衆としてたびたび二条家に伺侯することになる)
元禄12(1699)—弟乾山，鳴滝に窯を開く。光琳，乾山焼きを助け絵付けをする。(42歳)⊙光琳の後援者，中村内蔵之助銀座年寄になる。
元禄14(1701)—法橋に叙せられる。(44歳)
元禄15(1702)—中村内蔵之助の娘お勝を預り，養育を約す。(45歳)⊙赤穂浪士の討入り事件起る。
元禄16(1703)—この頃「燕子花図屏風」を描いたと思われる。(46歳)⊙近松門左衛門「曽根崎心中」上演。
宝永元(1704)—江戸に下向し，冬木家に寄留する。(47歳)
宝永4(1707)—酒井家の扶持を受ける。(50歳)
宝永5(1708)—この頃，中村内蔵之助のはからいで，息子寿市郎を銀座年寄の小西彦九郎へ養子にやる。(51歳)
正徳元(1711)—京都新町二条に屋敷の新築を始める。(54歳)
正徳2(1712)—⊙勘定奉行荻原重秀罷免される。
正徳3(1713)—息子寿市郎と妻多代に遺言状を書く。寿市郎，中村内蔵之助の娘お勝と婚姻する。(55歳)
正徳4(1714)—この頃「紅白梅図屏風」を描いたと思われる。(57歳)⊙銀座年寄中村内蔵之助等，金銀改鋳にからみ，遠島，重追放の厳罰に処せられる。
享保元(1716)—6月2日光琳没。妙顕寺興善院に葬られる。(59歳)

◉—スタッフ

製作＝森山忠彦＋村山英世　照明＝本橋俊男＋長坂 潔
脚本＝村山正実＋吉岡敏夫　編集＝沼崎梅子
演出＝村山正実　音楽＝池辺晋一郎
撮影＝藤井敏貴　解説＝仲谷 昇

◉製作—株式会社 桜映画社　〒160 東京都新宿区西新宿1-22-1スタンダードビル
TEL 03(342)5768　FAX 03(346)1844